

汝は人狼なりや？

—— Are You a Werewolf? ——

MGN

——ああ……ようやく終わりのときが来た。

どう足掻いてもここで終わり。やつは必ず襲ってくる。

なら、最後にオレが言うべき言葉は——

「汝は——人狼なりや？」

——そして、終わりが始まった。

*

山に囲まれた、いわば陸の孤島。オレの住んでいる村というのはそういうところだ。確かに人口はさほど多くはないし、交通の便とかはないし、まあ不便と言えば不便だが、それでもオレは長年住んできたこの村が好きだ。

「おい、涼くん、そろそろ暗くなるから、先にこっち手伝って——」

そうオレを呼んだのは、この村唯一のオレと同年年の瀬上 咲。子どもも少ないこの村でオレが退屈せずに過ごせるのは、こいつのおかげと言っても過言ではない。ま、恥ずかしいから言ったことはないけども……

「分かった、今行く——」

そういつて、咲のところに向かおうとした、そのとき——それはやってきた。

——おめでとう、キミは参加者だ。

キミの役職は『祈祷師』だ。では、存分に騙しあいたまえ——

前触れもなく頭の中に聞いたことのないダレかの声が響いて、そして、オレはそこで気を失った。

*

どのくらいの時間が経ったのか。いや、はっきり言ってそんなことはどうでもよかった。朝の太陽に照らされてオレが目を覚ました時、目の前に広がっていた光景を見てオレは言

葉を失ってしまった。

謂わば、そこは「地獄」であった。

家はほとんど倒壊し、辺りは真っ赤に染まり上げられ、それがヒトであったことを疑いたくなるような惨殺体がそこら中に転がっていた。何も分からず、ただ、こみ上げてきた嘔吐物。一体どのくらい吐き続けただろうか。おそらく、胃の中の全てをぶちまけて、オレはようやく現実を見るようにした。そうだ、まずは自分の家を確認しよう。そう思い、血の水溜りを避けながら、オレは走って自分の家へと向かった。

「ハハ・・・」

枯れた笑い。いや、本当はこうなっているだろうと分かっていた。しかし、オレはきつとこんな現実有り得ないと思いたかったのだ。だが、そんな幻想は全て、目の前に転がる親だったモノらしき首を見て、ぶち壊されてしまった。

有り得ない非日常に直面しながら、しかし、頭は急速に冷静になっていく。目が覚めてから生きたヒトにまだ会っていない。全てが殺されていた。なら、何故オレが生きている？ 運が良かった？ いや、そんな甘ったれた考えではいけない。次に危険なのはオレなんだ。いっどこで死が襲ってくるかわからない。そんな恐怖心に足が震えていると、またあの聞いたことのない声が頭の中に響いた。

——広場へ向かえ。そこでゲームが始まる——

広場？ ゲーム？ わけの分からない現実に直面してなお、わけの分からない声。自分の成すべきことが分からず、言われるがままにオレは広場に向かった。

土地だけは広いこの村を今いる場所から十分ほど歩くと、お祭り等の行事を行う広場がある。オレはそこら中にできた血溜りや、ヒトだったものらしき肉片を避けながら歩き、十数分ほどで広場に到着した。この間、やはり生きている人を見つけることはできなかった。

しかし、広場に到着すると、ちょうど中央のあたりにある噴水の近くに十人近い人影が見えた。オレはただ単純に嬉しくなって、その方向へと向かって走った。

「よかった。まだ生きている人いたんですね。一体この村はどうなっちゃったんですか？ 皆さんは今からどうされるんですか？」

生きている人に出会えた喜びで、感情が高まり、今持っている疑問を全部ぶちまけた。しかし、皆、無言でこちらを向いて何も答えてくれなかった。

「……どうして黙っているんですか！？」

先ほどまでであった喜びが恐怖に変わろうとしていた。ただ、誰一人として答えてくれない。それがただ怖かった。

「……何があったんですか……？」

ただ、自分には聞くことしかできない。そうやって誰でもいい、答えてくれと願っていると、それが天に届いたのか、思わぬところから声が聞こえた。

「涼……くん？」

その声には聞き覚えがあった。自分が一番好きな人の声。その声が聞こえただけで自分はまだ生きていけるのだと確信できた。だから、オレは急いでその声の主の方を向いて、

「咲……良かった……」

ただ一言、そう、呟いた。

「お、キミは宮田くんじゃないか」

不意に隣の男性がオレに声をかけてきた。

「ワシだよワシ。鷺頭だ。ははは」

そう彼にとつてのお決まりの挨拶でオレに声をかけたのはオレや咲の顔見知りで名前を鷺頭朗真と言ったかな。家が近所なのでよくしてもらっていた仲である。

「鷺頭さんも！ 良かった。けど、これって一体どうなっているんですか？」

知り合いが多かったことに気をよくして、オレはもう一度同じ質問を繰り返した。すると、今度はきちんと鷺頭さんが返事をしてくれた。

「それがね、何も……分からないだよ」

しかし、オレが望んでいた回答は返ってこなかった。

「分からないって、じゃあどうして皆さんはここに集まっているんですか？」

オレは出てきた疑問を矢継ぎ早に質問をする。

「声が聞こえたからだよ。この広場に來いってね。キミもそうなんじゃないのか？」

「そうだったんですか……」

どうやら皆も同じように何も分からないまま、ここに來たらしい。そうやってまた沈黙が続こうとしたその時、

——ようやく全員が揃いました。ではこれより、ゲームを開始したいと思います——

場がざわつく。一体何が始まるのか。皆一様に不安と恐怖を覚えながらその声の続きを待った。

——ゲームのルールを広場の掲示板に載せて置きましたので、各自で確認してください。今から三十分後にゲームを開始します。それから注意事項ですが、既に皆さんに役職を与えています。ゲーム開始までは一切口外しないこと。それとこの広場から出ようとは思わないことです。それでは——

一瞬の沈黙の後、誰かが立ち上がり、掲示板の方へ歩いていった。他の人もそれにつら

れ、一人また一人と掲示板へ向かった。ただ、オレはまず咲の方へと行った。

「何かよくわかんないけど、とりあえず一緒に見に行くか」

「うん……」

想像以上に元気が見当たらない咲。おそらく咲の親ももう……。

元気がない咲にオレは一緒に居てやることしか、声をかけてやることしかできないことに不甲斐なさを噛み締める。

結局一言も会話を交わさなのまま掲示板の前に着いた。

その掲示板には一枚の紙が張られており、それにはこう書かれていた。

汝は人狼なりや？

この村に人狼の霊がさ迷いこみ、村人に憑いた。その村人は、夜中になると、人狼に變貌し、村人を襲ってしまうようになってしまった。既に生存者はここにいる十三人全員である。このまま行くとすぐに全滅してしまうだろう。

そこで、ここでワタシが少しだけ生きる道を与える。それがこのゲームである。

このゲームでは、その人狼以外の正常な村人が力を合わせ、人狼を倒すことが目的である。

勝利したサイドの死人は全員生き返らせるので安心してほしい。

それではルール説明に入ろう。

■勝利条件

「人狼サイド」……「村人サイド」の人間を全て殺した場合、勝利となる。

「村人サイド」……「人狼」を全て殺した場合、勝利となる。

■時間経過について

「昼」……日が暮れかかるまで議論を交わせ。そこでの言動で人狼を見破るのがこのゲームの勝利への道だろう。

「夕方」……死人が出た次の夕方から、各自一票で投票を行う。そこで一番票数を集めた人を強制的に処刑する。この間の会話は「遺言」以外の一切を禁じる。

「夜」……二人一部屋で過ごしてもらおう。奇数になった場合、最後の一部屋は三人で過ごす。また、各自与えられた役職の行動を行使できるのは基本的に「夜」だけである。

■役職について

役職は自分以外の誰がどの役職についているのかは分からない。但し、人狼に限り、仲間の人狼を把握している。

・人狼サイド

「人狼」……三人

夜中に人狼に変身し、部屋の相手を襲う。襲った場合、相手は死亡する。

ゲーム中一夜だけ、襲える状況だとしても、部屋の相手を襲わなくても良い。

但し、二回、部屋の相手を「襲える状況で襲わなかった」場合、餓死してしまう。（部屋の相手が襲う前に死んでしまった場合や部屋の相手が同じ人狼だった場合等は「襲える状況」に当たらない）

一人の人狼が一夜に襲える事ができるのは一度のみである。

さらに「人狼」同士では念波により、離れていても意思疎通を図ることが可能になる。この能力に限り、「夜」以外でも使用することができる。

「狂人」……三人

夜中に自殺を行うことができる。自殺をした場合、他の死人と同じように扱う。

・村人サイド

「祈祷師」……一人

夜中、人狼に襲われた場合、ゲーム中一度だけカウンターを行うことのできる聖水を二日に付与する。

カウンターを行った場合、祈祷師は生き残り、人狼は死亡する。

「牧師」……二人

夜中、人狼に襲われた場合、ゲーム中一度だけブロックを行うことができるお守りをゲーム開始時に付与する。

ブロックを行った場合、人狼も、牧師も生き残る。この場合人狼は「襲った」扱いになる。

「村人」……四人

特に能力は付与されない。自身が持つ知恵で人狼を追い詰める。

ハハッ……これは夢か何か……？ いやそう考えなきややってられない。これが……ゲーム……？ 馬鹿げている。人を殺すのがゲームだなんて……

隣の咲の顔を見る余裕すらできない。こんな……こんな……。

周りの人間も一言も喋らないまま、ルールを読み終えたのか、読んでいると頭がおかしくなりそうになったのか、広場に戻り始めていた。オレもそれにならない、咲に戻ろうと促し、先ほど皆が集まっていた場所に戻った。しかし、何を話せばいいのか分からないのか、誰一人として喋ろうとしないまま、先ほどのゲーム開始の時間になった。

——それでは、今からゲームを開始します。一つ伝え忘れていましたが、例え生き残っても負けてしまった場合は……分かりますね。まずは「昼」からです。それでは皆さんご自由に議論を交わしてください——

それは更なる地獄の始まりを告げる鐘か。オレはこの声を聞いただけで吐き気がした。気持ち悪さだけが体中を駆け巡り、他の人も無言を守り続けたまま、時間が経ってゆく。そうしてどのくらい経っただろうか。太陽が既に傾いていた頃、突然、座っていた若い男性が声を上げた。

「多分みんな僕と同様にこんな意味不明なゲームとやらに巻き込まれて戸惑っていると思う。だけど、まずは僕たちで自己紹介しないか？ お互い知らない人も結構いるだろうし。あ、僕の名前は高浦 大祐と言います」

確かに、いろいろと納得いかないこともある。今だって何をやればいいのか全く分からない。だけど、とりあえず自己紹介をして悪いことはないだろう。そう考え、オレは立ち上がり、

「オレの名前は宮田 涼といいます。よろしくお願いします」

何がよろしくなのか分からないが、他に何も思いつかなかったので、その場しのぎで自己紹介を済ました。すると、他の人も立ち上がりだし、同じような自己紹介を始めた。

「小石川 未来と言う。まあよろしく」

「軸丸 夏希です。よろしく」

そうやって、一人ひとり簡潔に自己紹介をしていき、他の人も自己紹介が終わり、最後に顔色が悪いまま咲も立ち上がり、

「瀬川 咲です。よろしくお願いします」

これで、全員の自己紹介が終わった。

このゲームに参加しているそれぞれの名前は、

穴吹 和歌恵

稲崎 太一

鏡 桜花

川淵進

小石川 未来

軸丸 夏希

島野 黎

高浦 大祐

三溝 凜

湯村 哲西

鷺頭 朗真

そして、咲とオレの十三人らしい。そして、この十三人がこの村の生き残りというわけでもある。

自己紹介の後はまた沈黙が続くと思ったが、ここで鷺頭さんが声を上げた。

「ん、小石川ちゃんだっけ？ ワシは村全員の顔と名前を知っていたつもりだったけど、キミは見たことないし、名前も初めて聞いた。キミは本当にこの村の者なのか？ いや、いいたかないがワシから見るとキミが一番怪しいんだ」

そう言われた、小石川と言う長身の女性はこう答えた。

「確かに、私もアンタの顔と名前を知らない。いやそれどころかここにいる全員の顔と名前を今知ったよ。

私はこういうのもなんだが出不精でね。ま、アンタが知らないのも無理はない。けど、私はちゃんとこの村の住人だよ」

「そうかい。まあワシがキミを疑っているというのには変わりないよ」

二人の会話を聞いたオレはいてもいられなくなり、

「鷺頭さん、やめましょう。まだ何も分らないんです。疑うのがそれを声に出すのもやめませんか」

そう、鷺頭さんにそれ以上何も言わないようにとお願いとすると、

「宮田くん、キミは甘いね……疑ってかからなくてはおつちが死ぬかもしれないんだよ」

鷺頭さんは静かにそう言い放った。

気持ちには分らないわけはなかった。オレだってこんな意味の分からないゲームに巻き込まれ、挙句死ぬかもしれないデスゲームだなんて。

悲しいことに、オレは鷺頭さんの言葉に一言も言い返せなかった。

「あ、あの」

そう言って立ち上がったのは穴吹さんだった。

「話題が変わるんですけど、鏡ちゃんって、私初めてお顔を見たんですが、もしかして……」
穴吹さんが、その疑問を言い終わる前に、鷺頭さんが答えた。

「こんな珍しい苗字あまりいないよ。そのもしかしてだ。村長のお孫さんだな。いつもは近くの町に住んでいるが、昨日はたまたまこつちに来てたんだろ……村長さんはここに

来る途中倒れているのを見たよ」

「やっぱり、そうだったのですか……あ、ごめんなさい鏡ちゃん。別に疑ってるわけじゃないの。ごめんね、こんな辛いときに」

穴吹さんが軽い弁明をして鏡さんに頭を下げた。鏡さんは気にしていないのか、そんなことを聞いている余裕がなかったのか、特に何のリアクションも取らなかった。ただ、この中で一番最年少と思われる鏡さんならおそらく後者だろうが……。

そうしてまた誰も何も話さないまま時間が過ぎて行き、またあの声が聞こえた。

——さて「夜」になりました。これから皆さんには二人一部屋になってもらいます。私がランダムに誰かを選びますので、選ばれた人は誰と同室するかを選んでください。なお、一度同室になった人とは次の日以降、同室には選べませんのでご注意ください。では、まず稲崎さん。誰と同室するかを決めてください——

「お、俺？」

急に聞こえた声に加え、突然選ばれたことにも驚いたのだろう。稲崎さんが素っ頓狂な声を上げた。

「じゃあ湯村さんで」

「ああ、じゃあよろしくな」

しかし、すぐに冷静になったのか、稲崎さんは湯村さんを同室の相手に選んだようだ。湯村さんもそれに応え、稲崎さんの隣に座った。確かに、こんなよく分からないゲームを急にやれと言われたら悩んでも仕方がないのかもしれない。自分の知り合いと同室になれたほうが気が楽だし、できれば咲と同室になればいいけど。

——では稲崎さんと湯村さんは「1」の家に入ってもらいます。家へは後でいっせいにご案内しますので、安心ください。続いて小石川さん、誰と同室するかを決めてください

「宮田？」

……まさか即答でオレが選ばれるとは思わなかった。というか小石川さんはさっき怪しいとか言われてたっけ。そんなことで怪しむのはいけないかもしれないけど、ここまで躊躇いなく選ばれると少し怖い。

「は、はい」

オレは生返事をして、湯村さんに倣い小石川さんの隣へと行った。

——では小石川さんと宮田さんは「2」の家に入ってもらいます。続いて驚頭さん、誰

と同室するかを決めてください——

「ワシか。じゃあ咲ちゃん。」

さつきから喋ってなかったようだけど、ワシと一緒にだから怖がらなくていいからね」

そう呼ばれた咲は無言で立ち上がり鷺頭さんの隣へと向かった。まあ見知らぬ人と同室になるよりはマシか。

——では鷺頭さんと瀬川さんは「3」の家に入ってもらいます。続いて高浦さん、誰と同室するかを決めてください——

「僕ですかね。なら鏡ちゃん。いかがです？」

「……」

呼ばれた鏡さんは無言のまま座っていた体を起こそうともしなかった。

「あたら、やっぱり知らないお兄さんとは嫌だったかな……？」

……まあ確かにいろいろ問題があると思うけど……気にしてる状況でもないから仕方ないのか。

——では高浦さんと鏡さんは「4」の家に入ってもらいます。続いて三溝さん、誰と同室するかを決めてください——

「わ、わたしですか。えーっと、じゃあ島野さんで、お願いします」

「了解だ」

——では三溝さんと島野さんは「5」の家に入ってもらいます。そして残った軸丸さん、川淵さん、穴吹さんの三人は「6」の家に入ってもらいます。では皆さんを家に案内します。ここから広場の東の出口に向かってください——

各々が東の出口に向かって歩き始める。そんなに遠いわけではないが、既に暗くなっていると言うこともあり、一、二分程度で東の出口に到着した。すると、出口の外側に、不自然に並んだ家が六軒あった。おそらくだが、今健在している建物はこれだけなのだろう。

——皆さんから向かって左から「1」の家としてそれぞれ指定された家に入ってください——

言われたとおり、オレは左から二番目の家に入った。家の中は想像以上に綺麗で、軽く

見た感じだが、生活に必要なモノは全て揃っているようだ。

——皆さんにはこれから朝が来るまでその家で過ごしてもらいます。くれぐれも家の外に出ようと思わないように。窓も開きませんのでご注意ください。中にある備品や食料は全て自由に使ってもらって構いません。電気、水、ガス全て使えるので不自由はしなないとしますが、ゲームの途中だと言うことを忘れずに。それでは今から「夜」を開始します

「……よろしくお願ひします。えーっと、小石川さん」

「ああ、よろしく、宮田くん」

色々分からないことだらけで夜が始まったが、とりあえず聞くべきことは聞いておくべきだろう。

「どうしてオレを選んだんですか？」

「ん、どうしてって、名前を覚えていたのがアンタだけだったんだよ。それだけだ」

……それだけって……じゃ本当に適当だったのか……いやでもまだ、この小石川さんが人狼の可能性はある。疑うわけではないが、可能性がある以上、自分の生きる可能性を上げたほうがいいだろう。

「あの……」

しかし、オレが言い終わる前に小石川さんが簡潔に言い放った。

「私は人狼じゃないよ。安心しな」

なるほど、確かに人狼であるなら人狼じゃないと言うメリットは少ないだろう。しかし、可能性が消えない限りこれは早めにやっておいたほうがいいだろう。

「そうですか。それは安心しました。が、とりあえずオレも言っておきますね。

——オレは狂人です」

オレはこのゲームをどうやって勝つか、考えていなかったわけではない。

とりあえずこれでやっておくべきことは終わっただろう。これで襲われたら事故としか言いようがない。

もちろんオレは「狂人」ではなく「祈禱師」だ。ルールを見た限り祈禱師は人狼を倒せる謂わば切り札的存在なのだろう。これは正直運が良かったとは思っている。しかし、それ相応のデメリットはあり、一つは狼をカウンターしても、次の日になった時、客観的に見ればオレが狼で、同室の相手を襲ったように見えてしまう点。これはある種仕方のない面だろう。それで夕方の投票で「処刑」になるのは確かに嫌だが、人狼と相打ちになったと思えば結果的に村にとって有効であり、勝利をもたらせる可能性が広がる。何故なら、元々このゲームは人狼サイドの人数が少なく設定されており、人狼サイドの一人と村人サイドの一人とでは重みが違う。村人サイドにとって人狼サイドとの道連れは得と言えるだ

ろう。その相手が狼とあれば、能力を使い切った祈祷師一人の命と比べ物にならないだろう。

そして、もう一つ、これが今回の作戦の決めた要因だが、「祈祷師」は初日の夜は能力を行使できないという致命的な欠点があることだ。先ほどの狼との道連れも初日の夜を乗り切ってこそこのことであり、この夜を乗り切らないとどうにもならない。「祈祷師」は重要な役職である点からも、初日を乗り切るか否かに重点が置かれるだろう。

そこで出てくるのが「狂人」のカミングアウトである。初日の夜を乗り切るためには狼に襲われなければいいわけだ。相手が狼でないのならそれに越したことはないが、万が一相手、すなわち小石川さんが狼だった場合、どうすればいいか。それは人狼が襲いたくない相手だと思わせればいい。人狼は仲間の人狼が分かるが、仲間の狂人は分からない。すなわち、オレが狂人と言うだけで相手は襲うのを躊躇ってくれるかもしれないというわけだ。もちろん、これで襲われなくなったわけではないが、これ以上できることはないので、後は運を天に任せるしかないだろう。

「ははー、狂人ねえ」

「ええ、そうです。びつくりしました？」

「まあ、それなりにね、アンタが何を考えて狂人と暴露したのかはまだ分からないが、仮に次の日、私が『宮田は自分を狂人だと言っていた』と言えばどうするつもりだ？」

その程度のことなら既に解決策はある。

「確かにそれを言われれば、ある程度僕の印象が悪くなるかもしれないですが、それはあなたにも言えることです。僕が狂人のカミングアウトをしたことはあなた以外だれも知りません。であれば、あなたがそれを言ったところでそれが本当かどうかの証拠がありません。下手をすればあなたが狂人や人狼であると疑われかねませんし、それをするメリットは皆無でしょう」

「クック…：アンタはそれなりに頭が回るようだね。いや、なるほど。そこまで考えているとは。つまりアンタは本当に『狂人』か、もしくは初日に襲われたくない『祈祷師』ということかな。まあ死にたくない『村人』の可能性もあるけど、アンタが『村人』ならそんなことしないでろうしね」

チツ…：読まれていたか。名前を覚えていないとか言っておきながらこの人もやはりなかなか手ごわそうだ。しかし、読まれていたとしても、狂人が祈祷師か分からないわけで、襲われる確率が上がったわけではない。これも一応想定内ではある。

「まあ私も一応言っておくと狂人じゃないよ。ましてやさつきも言ったとおり人狼でもない。けど、アンタは信用しないだろうね。私を人狼だと疑ってこそその『狂人』の宣言なわけだし。さつきは『狼と疑うのはやめましょう』と言っておきながらねえ」

「それは違います。疑っているわけではないですが、可能性がある以上言っておくのが最善だと考えたまでです。小石川さんが人狼じゃないならそれに越したことはないです」

「ふーんそうかい。それはどっちの立場からの意見なんだろうねえ。ま、私は自分から動ける役職は貰ってないし、アンタがこれ以上動かないって言うなら、晩御飯でもつくりましようかね」

そういつて小石川さんは台所へと向かっていった。そうしてようやくオレも今日一日何も食べてないことを思い出した。すると、途端にお腹がすき始め、オレも台所へ向かおうと彼女の後を追うと、

「アンタの分も作ってあげるよ。味の保障はしないがね。それともアンタの腹を満たすのは私自身ってことかい？ そうだとしても味の保障はしないよ。ククッ」

小石川さんが、予想外なことを言ってきた。

「僕はさつきも言ったとおり、人狼ではなく狂人ですから、アナタを襲うことはしません。後、オレがこんなこと言うのはおこがましいかもしれませんが、もしよければオレの分も作ってください」

自慢じゃないが、オレは料理が出来ない。今も恥ずかしながらインスタントラーメンを作ろうとしていたのだ。

「ククッ、ああ構わないよ。ガキは素直なほうが愛嬌があるってもんだ」

「子ども扱いはやめてくださいね」
「善処するよ」

*

「ご馳走様でした」

「お粗末様」

なかなかおいしいご飯を食べさせてもらった後は、何をすることもなく、お互いにそれぞれの寝室へと向かった。どうやら本当に襲ってくるつもりはないらしい。狼かそれ以外はまだ確定できないが、今日襲われなければ十分だ。そう思いながら床に就いた。

眠る前に脳裏によぎったのは、今日、目が覚めた直後に見た地獄の景色。あれがおそらく人狼の仕業ということなのだろう。父さんや母さんの顔がもうすでに懐かしく思え、自然と涙が一粒零れ落ちた。ああ、絶対に許すものか。オレは全ての元凶である人狼に復讐を誓い、深い、深い、眠りについた。

*

——おはようございます。朝になりました。各自家の外へ出てください。またこれ以降、次の「夜」まで能力の行使を禁止します——

ハッキリ言って、最悪の目覚めだった。何度聞いても慣れることのない頭で響くような声。これを目覚ましにされたのだからたまったものじゃなかった。

しかし、何はともあれ生き延びることが出来た。正直自分のことでいっばいいっばいいだつたが咲はどうだつたのだろうか……オレは不安を胸にすばやく着替えて、外へと出た。

どうやら大半の人が既に外で集まっていたようだった。えーっと、ひーふーみー……今は十一人か。と、数え終わった瞬間、またあの声が聞こえた。

——これで全員揃いましたね。それでは皆さん、昨日の広場へと向かってください——

……予想はしていたがやはり少し堪えるな……いなくなったのは二人、稲崎さんと島野さんか……とりあえずこの話はきつと「昼」で議論されるだろう。今は広場へと向かうとしよう。それと、一体いつ入れられたのか全く分からないが、ズボンのポケットに聖水と思しきものが入っていた。次の夜からは襲われそうになればこれを投げればいいのだろうか……

——残念ながら稲崎さんと島野さんの二人が死亡しました。しかし、未だ人狼は潜んでいます。では、今から「昼」を開始します——

「昼」が始まって、真っ先に声を上げたのは高浦さんだった。

「稲崎さんと島野さん。残念でした……。しかしこのゲームで勝利すれば彼らを生き返らせることが可能とのことです。今は悔やむよりも人狼探しに尽力を注ぎましょう。」

そこでまずは、稲崎さんとの相手だった湯村さん、島野さんとの相手だった三溝さん。彼らに話を伺いましょう。後、もし、他の部屋で牧師のブロック等が行われていたのであれば、おっしゃってください」

高浦さんの発言に対し、誰も何も言わないので、次はオレが声を上げた

「じゃあ、三溝さん、あなたの役職は何ですか？」

議論の主導権を握りすぎると人狼と疑われそうではあるが、あのままいくと高浦さんだけで進行してしまいそうな雰囲気だった。一人に進行をゆだねるのは出来る限りやめておいたほうがいいだろう。

「えっ、私、人狼じゃないです！ 家に入ってちょっと目を離したらいつの間にか死んで……私もうわけが分からなくなって……」

役職を聞いたのだが、まあ確かに相手が死んでしまうと取り乱すのもあるいは仕方ないのかもしれない。オレもよくよく考えたら平静を保てる自信がない。

「つまり、相手は自殺したと言うわけですね。ではあなたは何の役職なんでしょうか」
しかし、三溝さんも人狼の可能性がある限り、同情をしている暇がないのは事実だ。

「私……ただの村人です」

「そうですか、なら湯村さんの役職は何でしょうか」

オレに出来ることは淡々と進行させること。今日の夕方には処刑投票が行われる……考える材料はあればあるほどいい。

「俺も村人だよ。いきなり自殺されて、いや参ったね」

この発言に対し、川淵さんが声を荒げた。

「お前、稲崎のツレだったろ。どうしてそんなあつげらかに自殺されたとか言えるんだよ……！」

「川淵、よく考えろ。裏切られたのは俺の方だ。あいつだって自殺すれば俺が疑われることは分かっていただろう。それを承知で自殺されたんだ。本当に怒りたいのは俺の方なんだよ。そこを勘違いしないでくれ」

「ふん、どうだか。本当はお前が人狼で稲崎をやっちまったんじゃないのか？」

「川淵さん！」

もっと早く止めておくべきだった。

「川淵さん、その発言に意味はありません。議論が進まなくなるだけなので出来る限りそのような発言は控えてもらえませんか」

例えば仮に湯村さんが人狼だとしても、湯村さんはそれを絶対言わないだろうし、人狼でなければ二人の溝を深めてしまうだけの結果となってしまう。

「チツ……餓鬼が……」

その川淵さんの発言で、これは終止符を打たれた。

オレはどれだけ罵られても構わない。元々顔見知りでもなかったわけで、深まる溝なんて存在しない。

「宮田くん、ありがとう。他に彼らに何か聞きたい人はいますか？」

そして、また高浦さんが進行を勤めた。まあ、オレが聞きたかったのは役職だけだから、後は高浦さんに任せよう。

「どうやら、誰もないみたいですね。では、皆さんも考える時間が必要だと思いますので、とりあえずいったんここで議論は休憩でいいですかね。また、聞きたいことがあれば各自で言ってください」

そうして、また皆無言になった。オレはと言うと咲の隣へと行っていた。

「咲、大丈夫か。怖いと思うがオレがついてるから安心しろ」

本当のところ、オレがついていても何かできるわけではない。でも、今はこう言うしかない。早くなんとかして、二人でこのゲームから抜け出せばいいのだが……

「……うん、大丈夫。ありがとう」

「良かった……何かあれば言ってくれよ。できるだけ力になる」

これ以上おびえている咲は見たくないんだ。そう思い、咲の頭をなでる。怖がっている

咲にこれをする、すぐに安心しきった顔になることを知っていたから。

「……本当……？」

「ああ、約束するよ」

そう言い終わったとき、今度は別の方向から声がした。

「おい、餓鬼ども！ 何をコソコソ話してるんだ！ お前ら本当は人狼じゃないのか！？」
……川淵さんめ……オレは急いで反論しようとする、

「川淵さん、子どもたちまで疑うなんてどうかしてます。それに人狼どうしは、念波により、喋らなくても意思疎通が出来る」と書いてあったじゃにですか。人狼どうしがコソコソ話をする必要なんてありません」

高浦さんがオレに代わって反論してくれた。

しかし、川淵さんはそれで納得するわけもなかった。

「ふん、狂人と人狼かもしれないだろ。それだったら念波かなにかしらねえが、意思疎通は図れないわけだしな」

「宮田くんと瀬川ちゃんがこれ以前に二人で会話をしていたことはありません。このゲームは他者の役職は分からないと言うルールです。仮に二人がそうだとしても、お互いにお互いの役職が分かるきつかけとなったことは一度もないですよね」

「けど、二人だけでコソコソ話でもされたら怪しくて仕方がないんだよ！」

「川淵さん、彼らはまだ子どもです。今回の件は大目に見てください。宮田くん、瀬川ちゃん、ごめんだけど、これから二人で会話するときは誰か他の人にも聞こえる状況で喋ってください」

それで一応納得はしたのか川淵さんは身を引いた。

しかし、今回の件で怪しいと思う状況を作ってしまったのは確かにオレの責任だろう。咲には悪いがこれが最善なのだろう。

「はい、ごめんなさい」

形だけきちんと謝っておいて、この話はこれで終わった。咲が何か言おうとしていたような気がするが、夜で相部屋にならない限り、それを聞くのは難しいだろう。

そうして各自、シンキングタイムに入っている中、今度は三溝さんが質問をした。

「あの、今日の夕方の投票、皆さんはどうされるんですか……？」

「それは、悪いがキミか湯村さんの二択ということになるだろうねえ」

そう答えたのは驚頭さんだった。確かに今回だと三溝さんが湯村さんの二択になるだろう。

しかし、その答えに不満があったのか、三溝さんはさらに皆に話しかけた。

「おかしいです。私は村人で相手に自殺されただけなんです？ それなのに……他にもつと選択肢はあるんじゃないですか……？」

「おかしくなんてないよ。仮にキミが本当にただの村人だったとしたら結果として村人と

狂人の一対一交換になる。それだとしても村人サイドにとつては、悪い選択肢ではないんだ。それにこれを言ったら宮田くんに怒られるかもしれないけど、キミが人狼で嘘をついている可能性は大にある。

そして、他の選択肢だが、特に怪しくもない人を投票の対象に選ぶのはリスクが高すぎる。この場合怪しいのはキミと湯村さんだけだからね」

全く持つてそのとおりで。鷺頭さんの反論には疑問の余地を挟む余裕さえないほど正論だった。

だが、それを聞いた三溝さんがとんでもない発言をした。

「……わたし祈祷師なのでリンチしないでください」

「バツ……」

カヤろう……と言おうとした瞬間

「バカヤろう!!」

オレよりも早く鷺頭さんがキレていた。

「いいか、よく聞け。お前が仮に本当に祈祷師だとする。そうするとどうだ？ 確かに村人サイドはお前に投票しなくなるかもしれないが、人狼はお前を警戒して襲わなくなるし、どうにかして投票でお前を処刑しようとする。つまり村人サイドのエースが封じられたまま終わってしまう可能性がでかくなる。

そしてお前がもし村人で、死にたくないから祈祷師とうそをついたのならすぐに取り消せ。村人はできる限り嘘をつかないほうがいい。村側で混乱をおこすだけだからな。さらにもう一つ言っておくと、このゲーム、村人は知恵で人狼を追い詰めると書いてあったがあれは全部がそうだとやわらないが、はっきり言えば嘘だ。村人は「死ぬ」事が重要なんだよ。例えば、夜、人狼に襲われて死んでしまったとしても、その襲った人狼に疑いをかけられることができるし、投票で死んでしまっても、牧師や祈祷師を処刑から守れるかもしれない。分かるか？ 村人サイドが勝てば結果的に生き返ることが出来る。なら、村人はより意味ある「死」を迎えることが大事なんだ。まあ、ワシからのアドバイスとしては、どっちにしても祈祷師発言は取り消せようことぐらいだ」

「……すみません、ただの村人です……」

三溝さんもこのゲームの肝が理解できたのかおとなしく従ってくれたらしい。

……しかし、ここまでの確に発言できるということは鷺頭さんは村人サイドと考えてもいいのだろうか。できれば、そうであってほしいが……。

そして、ここでまたあの声が聞こえた。

——さて「昼」が終わり「夕方」に移ります。これより「夜」開始まで「遺言」を除き一切の発言を禁じます。皆さんここより西の出口付近にある投票所へと向かい、投票してください。また、日が暮れ終わるまでは時間がありますので、悩みたい方はそれまで自由

に悩んでください。なお、投票の結果最多が同数だった場合、その者たちで各自弁論を行っていただき、その後、最多だった者以外で最多だった者を対象に決選投票を行います。そこでまた同数だった場合は、その日の処刑をなしとします。

「また、投票は公開投票です。誰が誰に投票したかがわかりますので、そこも含めてお考え下さい——」

オレの投票先は既に決まってある。悩んでも結果は変わらないだろうから、さっさと西の投票所へと向かった。

他の人は悩んだり、オレと同じようにさっさと投票に行ったりバラバラだった。結局全員が投票し終わったのは日が暮れかかる寸前だった。

——これで皆さんの投票が終了しました。では、投票結果を発表します。

「三溝」（七票）……穴吹、軸丸、瀬川、高浦、宮田、湯村、鷺頭

「湯村」（四票）……鏡、川淵、小石川、三溝

よって今回処刑となるのは三溝さんです。それでは三溝さん、最後に遺言として、言いたいことがあれば三分以内にどうぞ。その後は一人で南の出口へと向かってください——

「え、え、わたし……死にたくない。いや……わたし村人なのに……なんで、なんで……お願い、絶対生き返らせて……」

そういつて、三溝さんは泣き崩れてしまった。

祈禱師発言を取り消したとはいえ、やはり、祈禱師のオレからすれば怪しいのには間違いなかった。三溝さんには悪いが、村人サイドだったとしたら生き返らせるから待っててくれ。

——さて「夜」になりました。昨日言ったとおり、既に同室となった方は選べません。

但し、もし生きている方全員と同室になっていた場合、同室情報はリセットされ、自由に同室の相手を選べるようになります。

それでは、最初に穴吹さん、誰と同室するかを決めてください——

「じゃあ小石川さんで」

——では穴吹さんと小石川さんは「1」の家に入ってもらいます。続いて鷺頭さん、誰と同室するかを決めてください。

「鏡ちゃん」

皆慣れてきたのか、手早く進行が進む。

——では驚頭さんと鏡さんは「2」の家に入ってもらいます。続いて高浦さん、誰と同室するかを決めてください——

「えーっと、瀬川ちゃんで」

……また一緒になれる機会を失ったか……

——では高浦さんと瀬川さんは「3」の家に入ってもらいます。続いて宮田さん、誰と同室するかを決めてください——

ここに来て初めての指名権獲得か。残っているのは、軸丸さんと湯村さんと川淵さんか……仕方ない。

「軸丸さんで」

——では宮田さんと軸丸さんは「4」の家に入ってもらいます。そして残った湯村さん、川淵さんは「5」の家に入ってもらいます。では皆さん昨日と同じように東の出口付近のそれぞれの家へお入りください——

今日に関しては考えていることは特にならない。軸丸さんがもし人狼なら返り討ちにするまでだし、今日は少しだけでものんびり過ごそう。

——それでは今から「夜」を開始します——

そうして、二回目の夜が始まった。

*

うーん、なんと言うか軸丸さんは普通に良い人で、特に気にすべき点もないぐらい普通だった。

一緒に食べたインスタントラーメンは割と美味しかった気がする。

*

——おはようございます。朝になりました。各自家の外へ出てください。またこれ以降、

次の「夜」まで能力の行使を禁止します——

外に出てみると、どうやら今回はオレが一番早かったらしい、他の人の姿がまだ見えてなかった。

数分もすると、そろそろ他の人も集まりだした。

——これで全員揃いましたね。それでは皆さん、広場へと向かってください——

人数を数えてみると、十人居た。

あれ、十人……ということは今日は……

——今日は死者が出ませんでした。ですが、まだ人狼は潜んでいます。では「昼」を開始します——

やはり死者なしか。しかし、おそろく……

「おい、聞いてくれ、俺は昨日湯村をブロックした。やっぱり湯村は人狼だった！」
予想通り、ブロック宣言が出た。

「川淵デメエ、昨日は平穩に過ごしたじゃねーか。俺が氣にくわねえからってそんな嘘つきやがって。

そうか、お前狂人か！」

「んだとやんのか！」

——いい忘れてましたが暴力行為は禁止です。くれぐれも紳士の淑女的な行動をしてくださいね——

「チッ何が紳士的だ。一体こいつはどこで見てやがるんだ。村をこんなにしやがって、なあ湯村。お前もなんだろ、この村メチャクチャにしたの」

「あ？ お前そこまでにしるよ！ なんで俺が村をメチャクチャにしないとイケないんだよー！」

……これは止めるのは難しそうだ。他にブロック宣言もなさそうだし、今日の情報としては、川淵さんが湯村さんをブロックしたと言ひ、湯村さんはそれを嘘だと言ひ張った。ぐらいに捉えておけばいいだろう。

ただ、これ以外にも一つだけ確定した事項がある。

それは、三人の狼の内少なくとも二人は初日もしくは二日目の夜に同室しているという点だ。

今までの夜での死者や、今のブロックが全て狼による襲いだとしても、三つしかなく、しかもその内の二つは湯村さんが襲っているということになる。どう考えても、少なくとも一人は二日連続で襲っていない。「襲える状況で二回襲っていなければ餓死」するようなので、襲えない状況、つまり狼同士で同室があったのだろう。もし、川淵さん以外の牧師が狼をブロックしていたのなら、宣言しない理由がないし、同室以外では説明できない。と、言ってもこれで誰が狼が分かるわけではなく、あくまで「狼同士で同室があった」という情報が分かっただけだ。まあ情報はあればあるほど良い。これが後々生きて良くかもしれない。

結局今日の昼は川淵さんと湯村さんの口論だけで終了してしまった。

——さて「昼」が終わり「夕方」に移ります。日が暮れるまでに投票を終わらせませすように——

さっきの昼は長々と川淵さんと湯村さんだけで口論をしていた。容疑者らしい容疑者はこの二人だけなのでどちらかに票を入れる、ということになるのだろうか……

——これで皆さんの投票が終了しました。では、投票結果を発表します。

「湯村」（八票）……穴吹、鏡、川淵、小石川、軸丸、瀬川、高浦、宮田

「川淵」（二票）……湯村、鷺頭

よって今回処刑となるのは湯村さんです。それでは湯村さん、最後に遺言として、言いたいことがあるら三分以内にどうぞ。その後は一人で南の出口へと向かってください——

「川淵、お前だけは絶対に許さないからな！俺はただの村人です。皆さんどうか、村に勝利を、そして川淵に天誅を、どうかお願いします」

川淵さんと湯村さんを客観的に比較した場合、川淵さんが人狼サイドだとすると、狂人の可能性が高く、湯村さんが人狼サイドだとすると、人狼の可能性が高い。さらに湯村さんは一日目でも容疑者になっており、言ってしまうのは憚れるが、投票先の安牌とも言えた。この結果は当然と言えるだろう。

——さて「夜」になりました。それでは、最初に宮田さん、誰と同室するか決めてください——

ついに来たか……ようやくだ。

「咲む」

前の二日間は二人で話せる機会が訪れなかったから、本当に助かった。ここまで二人とも脱落してなかったことにも感謝しよう。

——では宮田さんと瀬川さんは「1」の家に入ってもらいます。続いて軸丸さん、誰と同室するかを決めてください——

「高浦さんで」

——では軸丸さんと高浦さんは「2」の家に入ってもらいます。続いて鏡さん、誰と同室するかを決めてください——

「……穴吹……」

「え、はい。よろしくね鏡ちゃん」

——では鏡さんと穴吹さんは「3」の家に入ってもらいます。そして残った小石川さん、川淵さん、鷺頭さんは「4」の家に入ってもらいます。それでは皆さんそれぞれの家へお入りください——

「1」の家に向かい、咲と一緒に家に入った。そして三回目の夜の始まりの合図が聞こえた。

——それでは、今から「夜」を開始します——

「ようやくだな咲。話したいことは色々あると思う。夜も長いしゆっくり話し合おう」

心からの本音話し、なんとも言えない安心感に包まれる。正直に話すというのはなんと心地良いことなんだろうか。

しかし、咲の反応はあまり良くなかった。

「どうして……どうして……こんなことになっちゃったの……ねえ涼くん助けてよ……」

「どうして……なんだろうな。オレにも分かんないよ。オレだって父さんや母さんがあんな姿になってたの、今でも思い出すと吐きそうになる。どうしてオレたちがこんな目にあわないといけないんだって。でもさ、今はとりあえず現状を抜け出せるようにお互い頑張ろう。それから考えればいいんじゃないか？」

ありのままの気持ちを伝え慰める。咲には偽りに慰めなんて要らない。ただ本音で語り合えれば良い。

そう思っていたんだ。この時までは。

『違う……違うの……わたし、もう止められない……自分が分からないの……誰も襲いたくないのに、日に日に抑えられなくなってくる……人が死んでも、もう何とも思わなくなってきた……わたし、どうなっちゃうのかな……』

ああ、なんだこの嫌な予感は……この先は聞いてはいけない。これ以上は……だが、止められない。知りたくないのに、自分の頭が現実を知れと体を強制する。

「咲、お前まさか……」

咲……ダメだ……それ以上は言わないでくれ……

「わたし……——人狼みたい」

——そして、オレの中の一つの世界が音を立てて崩れていった。

*

テーブルに並んだ豪華な食事の数々。その内の一皿を手に取り、ゆっくりと味わいながら食べた。

毎日食べていた、懐かしい味。素朴で、体中に染み渡るような美味しさ。ああ、これが咲の料理だ。

——ねえ、こんなことわたしが言えた事じゃないけど、多分これがわたしたちにとって最後の夜になると思う。だからせめて、わたしのワガママだけど夜が明けるまでは一緒に居てほしい。

咲のそんな最後のお願いを、オレは二つ返事で了承。今は二人で晩御飯を食べている。と、言っても咲は普通の食事では腹が膨れないらしい。しかし、形だけでも食べることはできるらしいので、こうして仲よさそうに食事を取っている。話していることは他愛もないこと。けれど、そんな話の合間に度々訪れる無言の間。これが、二人の考えを悲しいくらいに汲み取っていて、その度に涙が出そうになる。

ご飯を食べ終わった後は日常生活のような、毎日していたような些細なことをして、過ぎた。それが何よりも幸せだったんだと、気付いたから。

そして、最後に、咲が切り出した。

「ね、一緒に寝よ……?」

「ああ、分かった」

本当の最後の時間。オレもそろそろ腹をくくる時が来たようだ。このポケットの中の聖水を使うべきか、どうか。

布団の中で一緒にうづくまる。……もう夜明けは近い。

「ねえ……頭なでなでして……」

「うん……」

いつもどおりの安心しきった咲の顔、その顔に涙が流れていたことをオレは絶対に一生忘れないだろう。

「涼くん……ごめん……もう限界が来たみたい……」

「そうか……」

「本当に……ごめんね……」

オレはそつと布団から出て、ポケットの中で聖水を握り締める。謝るのはオレの方だ……
咲……ごめん……。

*

「……くん。宮田くん！」

意識が急に戻る。

「宮田くん、さつきから上の空でしたが、せめて質問には答えてください」

「ここは……？」

周りを見ると噴があり、数人の人間が居た。ああ、そっか。ここは広場か。

「それで宮田くん、あなたの役職は何なのでしょうか」

役職……その言葉を聞き思考が戻った。そうか、今はいつの間にか昼か。

「……オレは祈禱師です。咲はカウンターしました……」

眩暈がする……ああ、やはり咲はいない……そうだ、咲は死んだんだ……オレが……オレが殺した。

ならせめて、咲の分まで生きてやらないと、咲に合わせる顔がなくなってしまう。

「次は僕ですね、アレ、鏡さん何かあるんですか？ ではどうぞ？」

周りを確認する。今いるメンバーは、高浦さん、鏡さん、穴吹さん、小石川さん、川淵さん、そしてオレのたった六人。どうやら、咲以外にも軸丸さんと鷺頭さんが死んでしまったようだ。鷺頭さんが死んでいる……咲を失い、そして唯一の知り合いとなっていた鷺頭さんまでもが……

いや、違う。今は悲しみに暮れている暇なんてない。考えろ、これを生き延びる術を。

咲と、軸丸さんと鷺頭さんが死んだことにより、現在の容疑者はオレと高浦さんと小石川さんと川淵さん。

容疑者じゃない方が鏡さんと穴吹さんで少ないのか……

つと、鏡さんが何か言うみたいだ。

「——私が祈禱師なんですが……」

なるほど、ここに来て祈禱師の対抗ときたか。オレ視点では鏡さんが人狼はロジック的に有り得ず狂人が確定したわけだ。鏡さんが人狼だとするなら、二日目のオレとの同室で

パスを消費しているはずなので、一日目および三日目どちらも人狼と相部屋でなくてはならないが、三日目の相手である穴吹さんは一度も死者を出しておらず、人狼の線は有り得ないため、鏡さんも同時に人狼ではない。しかし、オレの視点では鏡さんが狂人で確定したが、他の人たちの視点では鏡さんが狂人だと言うのはおろか人狼サイドであるかどうかも分かっていないという方が多いため、これで疑われたオレが処刑されてしまえば、本当らしいものだ。

「なるほど、それは重要な情報ですね。とりあえずそれは後で言及できる話題として、僕が役職を言う番ですね。僕は牧師です。もちろんまだ誰もブロックしていません。相手には自殺されてしまいました」

高浦さんが話に入る。祈禱師の話を流してくれたのは少しだけありがたい。

「次は私か」

そういつて小石川さんが立ち上がり――

「私は、狂人だ」

――とんでもないカミングアウトをした。

驚いたのはオレだけじゃない。ここにいる小石川さんを除く全員が驚いていた。それもそのはずだ。夜の二人きりの状態で狂人と言っても特に問題はないが、皆が聞いている場で狂人だと宣言したら、処刑されてしまうはず……

いや、そうか……オレとしたことが全く気付かなかった。この狂人の宣言には――全くリスクが存在しなかった。

ゲームが続行しているということは少なくとも狼は一人存在する。そして、オレと鏡さんの祈禱師宣言。これはどちらかが嘘をついていることは誰から見ても分かるとおりで、村人サイドに嘘をつくメリットは少なく、どちらかが人狼サイドであることはほぼ明らかだ。そして小石川さんなら鏡さんが狂人であるということも大体見破っているいかもしれない。

六人中人狼一人と狂人一人がいるこの状況下での狂人のカミングアウトはうまくいけば、このままゲームエンドまで持っていける力がある。なぜなら、人狼サイドが三人だとすると、村人サイドも三人となる。人狼がそれに気付き、投票先を指定しようと、どう足掻いても三対三の同数となり、決選投票も同数で処刑は流れる。その後の夜で人狼がゆっくりと確実に村人サイドを襲っていけば、そのまま人狼の勝ちとなってしまう。

つまり、この状況を悪用されてしまえば、少し厄介なことになってしまう。

「うーん……確かに狂人の宣言は怪しいですが、怪しすぎて何か裏があると勘ぐってしまいますよね。二日連続で容疑者である川淵さんも怪しいですからね」

そう、高浦が呟いた。

それに対し、川淵さんが反論した。

「いやいや、狂人って言ってるようなやつだぞ！？ 処刑しても問題ないとは思わない

か？」

「はい、確かにそう思います。それに祈禱師も二人宣言していますし、やはりここは各々投票でいいんじゃないでしょうか」

その川淵さんの反論を高浦さんがうまくまとめた。

幸いだったのは、小石川さんの狂人カミングアウトを誰も悪用しなかった点だ。そろそろ昼も終わるだろう。

——さて「昼」が終わり「夕方」に移ります。日が暮れるまでに投票を終わらせませうに——

高浦さんの言うとおり、まだハッキリしないこの状況では各自で投票するほうがいいだろう。そうして、全員投票をし終えた。

——これで皆さんの投票が終了しました。では、投票結果を発表します

「川淵」(三票) ……穴吹、鏡、高浦

「高浦」(二票) ……小石川、宮田

「小石川」(一票) ……川淵

よって今回処刑となるのは川淵さんです。それでは川淵さん、最後に遺言として、言いたいことがあれば三分以内にどうぞ。その後は一人で南の出口へと向かってください——

「……………いやもう何も話すことなんてねーわ。とりあえず俺は牧師だから」

そういって、川淵さんはトボトボと歩いていった。

——さて「夜」になりました。それでは、鏡さん、誰と同室するか決めてください——

「……………宮田……………」

「……………ああ分かった」

——では鏡さんと宮田さんは「1」の家に入ってもらいます。そして残った高浦さん、宮田さん、穴吹さんは「2」の家に入ってもらいます。それでは皆さんそれぞれの家へお入りください——

人数が減ったせいとか、部屋割りもとても簡単なものになってしまった。

——それでは、今から「夜」を開始します。——

しかし、もう語るべきことはない。鏡さんは狂人で確定だし、向こうもそれが分かっているだろう。オレは台所にあった簡易食だけをボリボリとかじり、そのまま床に就いた。

——おはようございます。朝になりました。各自家の外へ出てください。またこれ以降、次の「夜」まで能力の行使を禁止します——

ああ、気付けばオレもとつくに壊れていた。もう誰かが死んでしまっても何も思わなくなっちゃったんだな。そう思いながら、ここにいない穴吹さんのことを考えていた。

いや、そんなことは分かりきっていたか。どんなに取り繕おうとしても、咲の死はオレの心をも冷たくしていったんだ。

——今日は穴吹さんが死亡しました。しかしまだ、人狼は潜んでいます。では「昼」を開始します——

残り四人。そしておそらく今日がこのゲームの最終日となるだろう。そんな予感がしていた。

「単刀直入に言う。高浦——お前が人狼だろ——」

「ええ、そうです。ちなみにいつから気付いてました？」

高浦は特に驚きもせず飄々と喋った。

「三日目の夜、咲が人狼と知ったときだ。咲は初日と二日目、相手を襲っていなかった。つまり初日か二日目、どちらかで狼同士で同室をしていた。」

咲の初日の相手は鷺頭さんで二日目がお前だ。その鷺頭さんは三日目の夜で亡くなったから、鷺頭さんは人狼ではない。自動的にお前が人狼だって確定したんだよ」

「はははっ、やはりあなたは少しだけ頭が回るようですね。咲ちゃんがあなたを襲って祈祷師の力を削っていただけで大変ありがたかったです。」

もはやあなたはただのデク。頭が良くても、僕が一襲いしてしまえばあなたも無残な屍になってしまうのは大変残念ですねえ」

意地の悪い笑みを浮かべ、こちらを睨む。ああ、そうだ、そのとおりだよ高浦。

「なんですか、その目は。まだ諦めていないという目ですね。無駄ですよ。もうこちらの勝ちも確定しているんです。ねえ、小石川さん？」

「……まあどう足掻いても無理だな。詰め方は悪くないと思ってたんだが、どこで誤ったんだろうな。ま、狂人でもないのに狂人と言うのはさすがに冒険しすぎたか」

そういつて、小石川さんは自嘲気味にククツと笑った。

「そう『無理』なんです。あなたたちが勝つためには次の部屋割り僕と鏡ちゃんを同室

にさせて、狂人の鏡さんを襲わせるしかないんです。けどねえ、それがもう無理なんだよ。分かるかい、坊や？」

ああ、今すぐにでもこの気持悪い笑顔をすっ飛ばしてやりたい。

「ちよーっと、子どもには難しかったかなあ？ 仮にもし坊やに部屋の相手の指名権が来たでしょう。しかし、指名権とは名ばかりで、キミが選べるのは僕だけなんだよ。どうしてかは聡明なキミなら分かるよね？」

ああ、知ってるさ、同室だろ。お前の顔見てるだけで何も喋りたくなってくるよ。その薄ら笑いをやめろ。

「キミはもう鏡ちゃんと小石川と同室になっちゃってるからねえ、残っている鏡ちゃんしか選べないって事なんだ。

同様に小石川に指名権が来ても、彼女が選べるのは鏡ちゃんだけ、鏡ちゃんが来ても小石川さんしか選べないし、僕に来たら、キミしか選べない。ま、好都合だけどね」

ああ、そんなこと百も承知だ。

「あ、そうそう、言い忘れてた。鏡ちゃん、この坊やに投票よろしくね」

その言葉に鏡さんは頷いた。

「ならオレはお前に入れるから」

そういつてオレは高浦をにらみ付けた。

「はははっ、無駄な抵抗はやめてくれよ。もう僕たちの勝ちが決まっているんだ。おとなしく負けてくれよ」

その言葉をオレは無視して、昼が終わるまで、沈黙を守った。

——さて「昼」が終わり「夕方」に移ります。日が暮れるまでに投票を終わらせませますよ
うに——

結局あの後、誰一人として喋らないまま夕方になった。もちろんオレが入れるのは高浦だ。

——これで皆さんの投票が終了しました。では、投票結果を発表します

高浦（二票） ……小石川、宮田

宮田（二票） ……鏡、高浦

よって弁論の後、決選投票に移りますが、対象のお二方、弁論は必要でしょうか。

「オレは必要ない」

「僕も要らないですね」

——では弁論なしで決選投票に移ります。高浦さんと宮田さん以外の二人は高浦さんと宮田さんのどちらかに投票してください——

こんなもの結果は目に見えている

——では結果を発表します

「高浦」(一票) ……小石川

「宮田」(一票) ……鏡

決選投票で同数なので今回の処刑はなしということになります。
ではこれより夜に移ります。高浦さん、誰と同室するかを決めてください——

「はははっ、ならば宮田くん。おねがいしますよ」

その言葉に対し、オレは無言でにらみつける

——では高浦さんと宮田さんは「1」の家に入ってもらいます。そして残った鏡さんと小石川さんは「2」の家に入ってもらいます。それでは皆さんそれぞれの家へお入りください——

こうして、最後の夜の幕開けが聞こえた。

——それでは、今から「夜」を開始します——

「どうですか、今のお気持は」

高浦があのおざったい笑顔を絶やさずにオレに問いかけた。

「今どころかずーっと最悪だよ」

「はははっ、そうでしたね。でももう楽にしてあげますからね」

そういつて、高浦は気味の悪い笑顔を浮かべた。

——ああ……ようやく終わりのときが来た。

「そうかい、ところでな、オレはずっと言いたかった言葉あるんだ」

どう足掻いてもここで終わり。やつは必ず襲ってくる。

「残念ながら、そのセリフを言わせずに昇天させてあげますよ！」

なら、最後にオレが言うべき言葉は――

「汝は――人狼なりや？」

――そして、終わりが始まった。

*

「――ウウアアアアア！！ 熱い！ 死ぬ！ 死ぬ！」

そこには、無残にも叫ぶ高浦の姿があった。

「ああ、お前はそこで死ぬんだよ。這いつくばってな」

「ウオオオオオアアアア！ どういうことだ！ 何故貴様は――聖水をまだ持っているんだ！！」

「三日目の夜、オレは咲をカウンターしたと言ったが、アレは嘘だ。

本当は、咲は――自ら望んで餓死をした」

高浦はこの言葉に信じられないといった表情をした

「ああ、お前には分からないだろうよ。人狼に心も体も乗っ取られたやつには……！！」

「クソツタレが！ 俺は勝っていたんだ！ こんなのは認めない！」

「いいや、お前の負けだ。いい加減楽になれ」

オレはそういって、残りの聖水を全てぶちまけた。

「ウオアアアアアアアアアア！ 貴様貴様貴様貴様貴様貴様アアア！！ ウッ

ア！！ グッ……」

それが高浦の断末魔となった。

「……人は死ぬときつて案外あつけないもんだよなあ……」

――ただ今を持ちまして、人狼は全ていなくなりました。村側サイドの勝利です！ 皆さん、家の外に出てください――

そしてその突然の声に驚きながらも外へ出てみると、小石川さんが待っていた。

「勝ったようだな。いやしかし、本当に勝てるとは思わなかったよ。ククッ」

「……全ては咲のおかげです。そういえば鏡さんは……」

「気がついたときにはいなくなってたよ。きつともう」

やはり分かっていたが負けた方は……いや、オレが同情する権利などない。今はとり

あえず生き延びたことに感謝をしよう。

「おーい！！」

すると、広場のほうから声が聞こえた。

「あ、川淵さんに穴吹さん、軸丸さんに三溝さん、それに稲崎さん！」

そこにいたのは試合中に死んだはずの村人サイドの人々だった。

「ああ、気がつけば広場についてね、少しして君たちが勝つたのだと分かったよ。本当によくやってくれた。ありがとう」

川淵さんはそういつて、オレの手を握った。

「いえ、僕は何もしてません。それに結局生き残ったのはたったの7人です……」

「……そうだったな。村も結局壊滅状態のまま……」

七人の間で重たい空気が流れる。

「……あの、オレたちで墓を作りませんか」

突然ひらめいた提案、気まぐれの類かもしれないが、そのときのオレにはそれが必要だと感じていた。

「……ああ、そうだな、村全員の墓を作るか。と言っても、簡単なのしかできそうにないがな」

結果的には全員賛成で、簡易的なお墓を作ることになった。

その後は、警察等もやってきて、事情聴取で数日拘束されたこともあった。変なゲームに巻き込まれたといったらややこしくなるというって、秘密にしていたのにこのザマだ。いや、隠していたからこそか。知らない人が見れば、何が起きたのか全く把握できないだろう。とは言っても、オレたちですら実際に何が起きていたのかよく分かっていないのだ。もうどうしようもないだろう。

オレは大人たちの色々な話し合いの結果、親戚のおじさんの家に引き取られることになった。他の人も村を離れるほかになかったようだ。

川淵さんなんかは、村が大好きだったようで、離れることに一番渋っていたりした。しかし、やはり、再生不可能という現状を鑑みて、諦めたようだ。

小石川さんは気がつけばいなくなっていて、未だに消息不明だ。彼女は一体何者だったんだろうか……

——そして事件から一年後

「お久しぶりですね、あなたもお墓参りですか」

「ククッ、久しぶり、ま、私もここには思いいれが強いかからね」

久々に訪れた村には、小石川さんの姿があった。

「今から咲のお墓参りにいくんですが、良かったらどうですか」

「それじゃあ私も行こうかな。彼女には結果的に命を救われたわけだし」
そうして、二人で川のほとりにまで向かった。

「ここが彼女のお墓なのかい？」

彼女は小さく咲いている一輪の花を見た。

「ええ、人狼だった人たちのお墓を作ることは反対している人もいましたし、目立たない場所に、ね」

「なるほど。川の瀬に咲く花ね。彼女の名前から取っているわけか」

「そうです。つてあれ、小石川さんちゃんと名前覚えてるじゃないですか」

確か、小石川さんはほとんどの人の名前を覚えてなかったはずじゃ……

「ククッ、なんのことだっけ」

……本当に、この人だけは謎だ。

「ところで、坊やはこれからどうするんだい？」

「……子ども扱いはやめてください」

「ククッ、悪かった。で、これから何かするつもりなんだろ？」

この人絶対わざとだ。オレが嫌がることまで覚えてるなんて……

「でも、どうして何かするつもりだなんて思うんです？」

「いや、目に映ってるよ。やってやるーって闘志がね。やっぱり子どもだ。ククッ」

ああ……この人には一生敵いそうにないな。

「オレね、バカらしいと思われるかもしれないですけど、この事件の首謀者をとつちめてやりたいんですよ。」

もちろん、犯人なんて分からないし、そもそも犯人がいるのかすら分からないで分からないことだからですけど、それでもしないとオレの気が晴れないんですよね」

「ククッ、アンタは素直でいいね。ああ、気に入ったよ。私もそれに手伝ってやる」

む……また子ども扱いされた気がするが……

「本当ですか、ありがとうございます。小石川さんが手伝ってくれるなら百人力です」
手伝ってくれるのは確かにありがたい。オレは素直な気持でお礼を言った。

「そうかい、それなら良いけどね」

「ええ、そうです。本当にありがとうございます」

小石川さんが手伝ってくれるなら、いける。確証はないが、なぜかそんな気がしていた。咲のためにも、オレのためにも、この復讐だけは必ず成功させてみせる……！

その日、オレは、そう決意した。

——この時、遠く遠く離れたこの地で、彼らを見守っている姿があった
「こいつらが俺らを倒すって？ 寝言は寝て言えケケケ」

Fin